

日本語教育を学ぶ学生のためのHoT-JeT合宿2025

私たちが見た日本語教育の現場と魅力 ～仙台国際日本語学校～

2025年8月24日～25日、北海道・東北地域の大学で日本語教育を学ぶ大学生・大学院生8名が仙台に集まり、合宿を行いました。合宿では、仙台市内にある日本語学校2校を訪問させていただきました。学校や授業の様子を見学し、講師の方々に直接お話を伺うことで、日本語教育の実際の現場とその魅力を学ぶ貴重な機会となりました。本記事では、その体験を学生の視点からご紹介します。

学校の概要・特色



学校法人 日本コンピュータ学園 仙台国際日本語学校 <https://www.sjls.ac.jp/>

仙台駅から徒歩5分に位置する仙台国際日本語学校は、図書室、PCルーム、食堂などの充実した設備を備えています。定員は300人で、クラスは16クラスあります。学生の出身国は20か国と多様で、その構成比はネパールが48%、ベトナムが13%、バングラデシュとパキスタンが8%と、半数近くをネパールが占めています。

こちらの学校では、教務課と支援課に業務が分かれており、充実した学生サポートを可能にしています。入学時のアパート入居や役所での手続き、生活の困りごとの相談や、アルバイトの紹介、病院への付き添いなど異国で生活する留学生が安心して暮らせるように手厚いサポートを行っています。

さらに、特色ある「iタイム」やプロジェクトワークという授業があります。iタイムはそれぞれの先生が自由に内容を考えて行う授業です。早口言葉やかかるた、習字、ビジターセッション、自分で物語をつくるなど、様々な内容となっています。プロジェクトワークは、教科書に沿って週に1～2度行う授業で、パワーポイントを使った発表やビデオの制作などを行います。どちらの授業も、学生が日本語を楽しんでアウトプットでき、日本文化に親しみながら言語運用能力を伸ばすことができそうな授業だと感じました。

授業見学



私たちは多読のクラスと初中級クラスを見学させていただきました。多読の授業で使用されていた図書室には、学生が授業で作成した本も展示されており、学びの成果を共有できる場になっていました。初中級のクラスでは教師の問いかけに対して、学生が積極的に発言している様子が見られ、活発で前向きな雰囲気を感じられました。授業では複数の文型が扱われていましたが、教師の方は言い換えや身近な例を交えながら、分かりやすく説明していました。

また、今回の訪問では学生と交流する機会も設けていただきました。交流の場では、大学生と留学生が「互いに勉強していること」や「努力していること」などについて語り合いました。さらに、留学生の母語で大学生が自己紹介をするという活動も行われ、留学生が先生役となる場面もありました。私たちは今回

ネパール語での自己紹介を教えてもらいクラスで発表しましたが、初めて勉強する言語を話すのには勇気が必要であることを改めて実感しました。発音や表現を教えてもらい、不安を感じながらも勇気を出して話した言葉が伝わったと感じた瞬間は、不安が吹き飛ぶような嬉しさがありました。今回学ぶ側として経験した、この「嬉しさ」を感じる瞬間に身近で立ち会うことのできる職業が日本語教師だと思います。この交流は、言語を学ぶ人の努力や勇気に寄り添い、その成果と一緒に喜べる存在としての日本語教師の側面を強く意識する貴重な経験となりました。

講師インタビュー

「一人ひとりと向き合う日本語教育」

このインタビューを通して、I先生の学習者の方に寄り添う姿勢が強く印象に残りました。I先生は、教案作成や授業外の進路相談など、様々な業務を抱える中でも学習者の方とのコミュニケーションは欠かさずに行い、学習者の方の

国のことや学校外での様子などを積極的に聞くようにしているそうです。授業の中で「そういえば、以前こんな話をしていましたね。それをこのように言い換えてみましょう」といった形で、授業外的话题を活用することができるということです。このような授業外の時間での交流が、教師と学習者の信頼関係を築き、学びを深める上で大切なのだと感じました。同時に、日本語を教えるだけでなく、一人ひとりの人生や背景に寄り添おうとする姿勢が感じられました。さらに将来日本語教師を目指す学生に向けてアドバイスがあるかお聞きしたところ、日本語教師の基本である日本語文法はしっかりと勉強をする必要があるとおっしゃっていました。そのうえで、学生のうちに様々な教材に触れることも重要であるとのことでした。I先生自身も慣れない教材での教案作成に苦労しているようで、自分なりに教案作成をしたり教材の特徴を調べてみたりすることを勧めていました。

ただ日本語を教えるのではなく、一人ひとりの声に耳を傾けながら教えていく必要があると感じました。I先生の言葉に触れ、私もまた、様々な教材に触れながら教材を活用する力を養っていききたいと感じました。

「日本語教育と多文化共生」

「学習者たちが勉強をし、専門学校や大学に進んで、就職して日本の社会に溶け込んでいく中で…」と、学習者の人生設計を見据えながら話してくださったのはT先生です。日本語教育が今後どのようなになっていくべきかという質問に対して、T先生は深く悩みながら、このように話してくださいました。「外国人だから分からないと思われるでごまかされ、嫌な思いをする学生もいます。一方で、学生たちも夜にうるさくしたりごみ捨てのマナーが悪かったりして、日本人に迷惑をかけることもあります。」T先生はお互いが幸せな形で生活していくにはお互いをもっと知ることから始めるべきだとおっしゃっていました。そのために私たちができることについても尋ねるとT先生は「日本語教師ってなんですか？」という風に聞かれるとき、もっとこの仕事が広く知られていく必要があると感じます。」とおっしゃっていました。私自身も、日本語教師と国語教師の違いを尋ねられた経験があり、この職業が世間には周知されていないと感じることが多々ありました。日本語教師という仕事とその魅力を、日本語教育に携わっている人に限らず、もっと多くの人に知ってもらいたいという思いから日本語教師を目指した私の気持ちと、重なる部分がありました。また、仙台国際日本語学校さんでは、ブログ活動を行っています。これは「仙台国際日記」というもので、学内での数々のイベントが記録されています。この活動は、日本語教育を地域の人に知ってもらうという点でとても有意義なものだと感じました。

T先生へのインタビューを通して、「日本語が母語ではない人に日本語を教える」という意味以上に、日本語教育が多文化共生という広い意味をもって発展していくべきだと感じました。地域との交流を増やして日本語教育の世界をもっと知ってもらうことが、日本語教育の未来への第一歩につながるのではないのでしょうか。

訪問の感想

日本語学校でのアシスタント経験はありましたが、学生の方々と交流会や講師の方へのインタビューは初めてだったので、とても新鮮でした。学生の方々の互いに学び合う姿勢と、積極的に発言する姿勢がとても印象的でした。誰かがわからないことは別の誰かが手助けをすることで、クラスメイトとしての絆がとても強く感じられました。常に活気のあるクラスの雰囲気が素敵でした。自身の学習のモチベーションにもつながる、とても素敵な経験でした。

M.T.(北海学園大学)

日本語教育の現場を見学し、実際に働く先生方やそこで学ぶ学生と交流できたことはとても貴重な経験でした。インタビューや授業・校内の見学を通して、学生へのサポートが充実しており、学びやすい環境が整っていることを強く感じました。また、日本語そのものの習得だけでなく、日本での生活支援も充実しており、それが学生と地域を繋ぐ大切な役割を果たしているのだと思いました。

S.M.(国際教養大学)

日本語学校での現場を体験し、日本語教師の新たな魅力を発見することができました。学習者の方と交流した際には、ベトナム語とネパール語を学習者の方から教わり、日本語にはない発音の仕方に難しさを感じました。しかし、教わった通りに自己紹介をすると笑顔で応答してくださり、相手の言語を使って相手に伝わる喜びを実感しました。授業中には、教師の方が学習者の方の身近な質問を問いかけており、話の膨らませ方にも感銘を受けました。

A.H.(北海道教育大学函館校)

今回初めて日本語学校を訪問し、学校や授業のあたたかい雰囲気がとても印象に残りました。授業を見学して、日本語教師の方は学習者が興味をもって取り組めるように内容を工夫していると感じ、学習者が楽しそうに勉強をしている姿が心に残りました。日本語教師の方に直接インタビューするという貴重な機会もいただけて、日本語教育への関心がますます高まりました。

M.K.(岩手大学)